広島大学附属福山中・高等学校
中等教育研究紀要　第39巻

心の教育と美術教育
－自己の内面を見つめる二つの自画像制作－

芸術科（美術）　高地　秀明

描くという行為は，何かを認識し，深く心に刻み，表現することである。描かれた対象が何であれ，それは自己表現であり，自分を映した鏡のようなもの，つまり，自画像であるといえる。生徒たちはそれぞれに多様な感性や個性を内包しており，高校生の発達段階では表現の欲求が高まるが，美術の授業ではそれが作品という形で現れる。本実践研究は，自画像の作品制作をとおして，美術と心の教育のかかわりについて考察するとともに心のふれ合う指導のあり方やその背景について検討したものである。

1．はじめに

近年，いじめ，不登校，凶悪化する青少年非行，異常な問題行動など，憂慮すべき状況がある。子どもたちの倫理観や社会性の不足，社会全体のモラルの低下などの状況等を背景として，心の教育の充実と心の教育の在り方の指摘がなされている。

美術教育は以前から「感性」や「個性」といった直接心との関わりをあつかう教科として，「心の教育」を重要な柱の一つとしてきた。本実践研究では，高等学校美術の自画像の制作をとおして，自己の内面を見つめ，自己との心の対話，自己と他の生徒との対話，教師と生徒との対話など，作品制作の中から心の教育をとらえ，美術教育とのかかわりについて考察する。

2．自己表現としての二つの自画像制作の実際

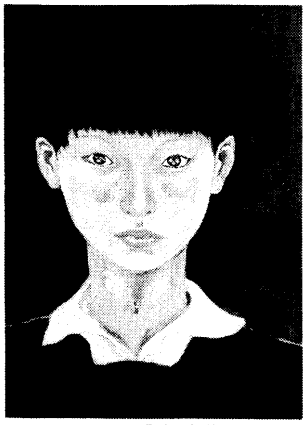
二つの自画像制作とは，一つは鏡を見ながら描写することを主体とした絵画制作で，素材はキャンバスと絵の具である。もう一つは心象風景の中の自画像をテーマとしたもので，スクラッチボードを素材としている。

(1)　白いキャンバスの緊張からの解放

前者の自画像制作の最初，生徒に真白なキャンバスを渡すが，これにまず好きな色を自由な方法で塗らせる。きれいに平面的に塗ってもよいし，にじみやぼかしを入れながら楽しく塗ってもよい。これは，まずキャンバスを「自分色」に染めておくことにより，白いキャンバスに描くときの最初の一筆の緊張から生徒の気持ちを解放する事がねらいである。こうしておくと生徒はゆったりとした気持ちで制作に入ることができる。

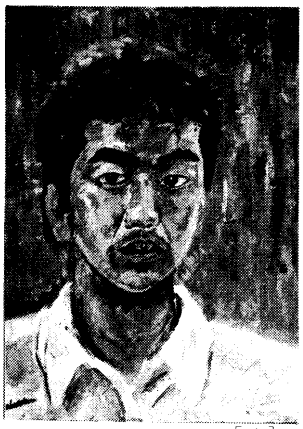
(2)　鏡に映る自分を描く

鏡を見ながら描く自画像は，基本的には通常の絵画制作のプロセスである。（生徒作品［１］～［６］）キャンバスを「自分色」に仕立てた後は鉛筆やコンテでデッサンし，彩色していく。このとき，うまく形が取れなくて制作意欲を継続できなくなる生徒もいるが，形を写し取ることにのみこだわるのではなく，自分なりの特徴をとらえていくようなヒントを与えると自ら形態を把握していく。そして単に顔の輪郭や目鼻口といった表面的な形だけの描写からしだいに自分の本質に目を向け，自分の特徴や自分とは何かという想いが形態や色彩を描き込むにつれて，内面性を伴った自己表現として現れてくるようになる。

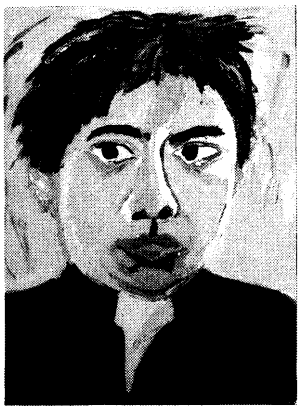

［生徒作品１］

［２］

［３］


［４］

[5]

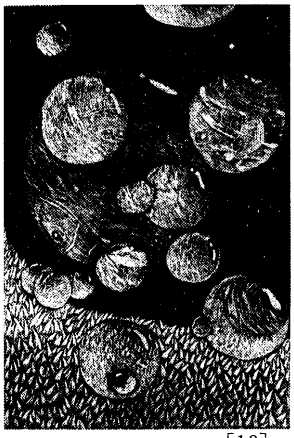


[6]

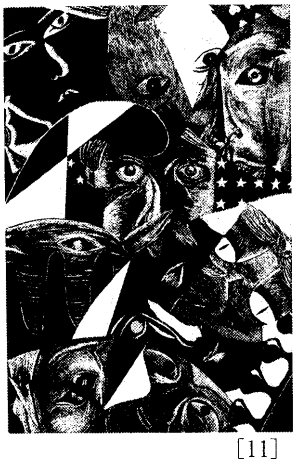
[7]

[8]

[9]



[10]



[11]

[12]

(3) 完成を予想させない「心象風景の自画像」

心象表現を題材とした「心象風景の自画像」（生徒作品[7]～[16]）では，あえて，制作のためのアイデアスケッチや下書きなどはおこなわないようにしている。つまり構想を練るといった完成への明確なプロセスを持たせないのである。最初にいきなり画面の任意の場所に形を描く。それと同時に，画面上に直線や曲線などを自由に入れる。このときも具象的な形態は意識させないでのびのびと自由に線のおもしろさを体験させる。このようなオートマティズム的方法によって創られた画面から自分なりの絵画創作への発展を考えさせる。例えば，画面上の不思議な”しみ”や偶然に線で囲まれた特徴的な形態などを手がかりにして想像を膨らませながら描いていく。しだいにそれらがものの形や風景，物語のような情景など具象的な形態に進化する場合や超現実的傾向を強めていくもの，抽象的な表現を一層進めるものなどがあり，いずれの表現の方向も規制しないで自由な発展を求めさせる。制作初期の段階においては無造作に描画しているだけのように見えるが，やがてそれぞれの個性的な造形意図が芽生えはじめ，自分なりの表現へ昇華していく。

このような方法をとる理由は，生徒の持つ作品制作の常識的な観念を覆し，新鮮で多様な発想と内面性の表出を期待するからである。

3．作品制作をとおしての心のふれ合い

(1) 作品は心を映す鏡

絵画はどのようなものが描かれているにせよ，作者の心の何かが映し出されている。それは題材が何であっても，また，個性や表現意図を明確にしたもの，そうでないものでも，キャンバスの上には何かが現れている。例えば，授業の課題だから仕方なく描いた絵はそのことを物語り，興味関心のあるところはその部分の観察がとても鋭かったり，対象から何かを感じながら描いたものには心の動きが絵に現れる。その時の想い，思考，精神状態，態度などが反映しているのである。鉛筆や筆の線も筆触や筆圧などに一人ひとり異なった持ち味が現れる。躍動感のある大胆な線，繊細で微妙なニュアンスのある線，たどたどしい線など多様である。これらは表現上の時々で長所や短所となったりするが，生徒それぞれの個性的な表現へ昇華していく場合も多く認められる。私は生徒たちの絵を観るとき，何に興味を抱いてものを見ているのか，その感じ方，視線，姿勢などをくみ取りながら，その中に秘められた様々な想

[13]

[14]

[15]

[16]

いを発見することに留意している。そうすることで生徒個々の内面を僅かではあるが理解でき，そこから対話の糸口が見いだされ個に応じた適切な指導が可能になると考えている。

(2) 適切な指導と助言のあり方

教師は制作の初期の段階では構図や形の把握について技術的な助言をおこなうこともあるが，作品制作の深まりを見つめながらそれぞれの段階や生徒の想いに配慮した指導が大切である。助言をおこなう場合も，生徒が明確な表現意図をもって描いている思われるときは，そっと，「ここはどのようにしたいと思っているの」と尋ね，まず生徒のよき理解者になる必要がある。生徒の想いに沿った，それを支援する助言があれば，生徒は教師に心をしだいに開き始め，絵画制作をとおして真に心のふれ合いが始まる。技術的に「これはよくないからこうしなさい」という指導では生徒の内面的な表現の芽を摘んでしまう恐れがある。

私は絵画制作の授業のとき，机を回りながら全ての生徒に1回は声をかけることにしている。表現意図や現時点での課題を尋ねたり，これからの展開を聞いたりする。そして必ずよいところを見つけて誉めることにしている。それは形態や色，思考の段階や取り組む姿勢であったりするが，まずは生徒のありのままの表現を認め，内面的な思考に配慮しつつ適切な指導と評価を加えるのである。あまりうまく描けていない生徒ほど，劣等感と表現への欲求不満を内包しているが，誉めることにより生徒は自分が理解されているという心の安定感を持ち，発展への意欲につながっていく。例えば，彩色での色彩感覚はその生徒の感性や個性に密接に関連したもので，「ここの色はよくないね，別の色にしたほうがよい」というような指導は好ましくない。生徒の色をまず認め，それを生かすために「君の色を引き立たせるにはこういう方法もあるよ」などと生徒の感性の伸長を支援するような助言や新たな展開を引き出すヒントを提示することが最も重要である。

制作途中の段階で生徒全体への講評をおこなっている。多様な特徴を持つ生徒作品の幾つかをＴＶカメラをとおしてモニターＴＶに映し，個性的な表現の工夫や形や色などの良さについて話す。「こんな作品がよいのだ」というような単一の価値基準による見方でなく，それぞれの感性や個性的な表現の持つ素晴らしさを指摘しながら作品理解を深め，多様な個性をお互いに見つめ，認め合うことを大切にする。完成後にも同様の講評や鑑賞をおこなうが，結

果的にうまく表現しきれなかった作品についても，作品制作のプロセスにおける創意工夫の努力やアイデアの良さなどについて評価し，次の作品制作への発展につながり，希望を抱けるようなコメンおこなう。

(3) 描くことの意識

高校生の絵画についての意識は多様である。感性・興味・意欲・表現力などの段階もかなり異なっている。高校での芸術科目は音楽，美術，書道，工芸の中から選択して履修する。積極的に美術を選択した生徒は半数程度で，これらの生徒は描くことの楽しさやその技術を持っているが，「でも・しか」といった消極的な生徒の方は，自分で絵は下手だと思っているものも多く，意欲もなく選択するケースも少なくないのが実態である。これらは今までの美術教育の中で美術嫌いになった生徒たちかも知れない。生徒の興味についても，いわゆる写生のような描画表現を好む生徒がいる反面，ポスターやイラストレーションのような表示的な描写に生き生きと取り組む生徒もいる。描くことよりも粘土や木などで造ることには熱中する生徒もおり，実態は多様である。いずれにしても，どのように興味関心を導くか，授業の導入時の取り組みが重要となる。

年齢が進むにしたがって描画能力の違いが顕著になってくるが，それにはそれぞれの成長期においての特徴が大きくかかわっている。小学校低学年の頃までの描画は主観的・感覚的で生き生きと描き個性的である。しかも，心の動きも活発に感じられる表現である。しかし，小学校高学年から中学校の時期では，ものを見たとおり客観描写する意欲が急速に高まるが，その反面，物を再現模写する企ての中で描写技術が伴わず，苦手意識を持ち，絵を描く意欲が消え失せ，自分自身も周囲の者も絵の上手な子と下手な子を振り分けてしまう。それまでの生き生きとした表現が失われ，純粋な絵としての面白味が無くなる。ところが高校生の時期になるといろいろな方向に興味関心が広がり，その表現も多彩になりそれぞれ自分のアイデンティティーを確立しようとする方向に深化するのである。

(4) 両極の絵画指導

前述のように様々な発達段階の中で，美術教師はどのような視点を持って表現指導をしているのだろうか。

絵画指導について極論的に二分すれば，「生き生きと」「伸び伸びと」「もっと感じながら」など創造的意識を強調するタイプ，描画技術とその方法を徹底的に教え込むタイプの二つがある。前者の場合は，美術教育の合言葉のように「自主的・創造的」意義を強調し，生徒ありのままの感性や持ち味を大切にしようとし，技術指導に対してその弊害を常に指摘する。「もっと細かく丁寧に描こう」「ここの色はもう少し明るくしよう」「ここにもう一つ形を入れよう」というような指導は生徒の感性や自主性を奪ってしまうと主張するのである。後者は，描くための手段や特定の模範的な絵の描き方を積極的に教え，「うまく描けたか」にこだわり，生徒たちの内面性よりも描画形式や作品のできばえが優先し，教師の持つ望ましい作品像に近づけようとする。コンクールに入選することも目的となるのである。また，生徒の興味を優先する余り，系統性がなく何を育てようとしているのか意味不明で，安易な興味本意的な作業を作品制作として取り組ませている場合もある。しかし，端的に言えば，美術教育の本質的な目的意識を持っていれば，創造的・個性的な表現能力の向上と，描画技術を指導することは少しも矛盾はしないと考える。いずれにしても，生徒の内面性に配慮し，表現の背景にある心の問題に視点を置いた指導のあり方が求められる。

(5) 美術の授業に正答はない

戦後，日本の従来型教育は常に結論と正答の授受をマニュアル化した学習に重点を置いてきた。子どもたちは問いに対して，何故そうなるのかを考えるのではなく，正答を懸命に覚える学習が中心であった。教師は用意された知識を生徒に如何に効率よく詰め込むか，その教授法について論議されてきたのである。しかし，そのことが豊かな発想や感性・創造性を育むことにつながらず，技術立国日本の将来が危ういという指摘が子どもたちの心の荒廃と呼応するように出現してきた。そこで，新学習指導要領では，自ら課題を発見し解決しようとする能力の育成といった「新学力観＝生きる力」や「心の教育」の大切さが指摘されている。従来から美術教育は，創造的な表現活動を通して「心や感性」を培い，個性的で創造性豊かな人間を育むことを主なねらいとしてきた。しかも，それはからだ全体を働かせ，材料を直接扱いながら自ら主体的に考え，表現する喜びを体験することでもある。表現活動は自ら課題を発見し，試行錯誤を繰り返しながら解決（自己実現）していく営みである。したがって，美術の授業の表現活動には決められた正答はない。もしあるとすればそれは子どもたち一人ひとりが生み出すものであり，それに至るプロセスもそれぞれに異なって

おり，多様であることに意味がある。美術教師と生徒は，教授者と被教授者といった関係ではなく，生徒が活動しやすいように環境を整え，折々のアドバイザーであり，生徒のよき理解者としての存在であることが望ましいと考える。

4．美術（芸術）で救われる心の危機

一般に日本人は欧米人と比較して自己表現することが不得手だと言われている。日本では個性を表現するよりは他と同じ様にしていれば社会生活は平穏であり，自己を主張すれば特異な存在として敬遠される風潮がある。そのうえ，現代の子どもたちにおいては，画一的で効率を求める教育システム中で自己表現する機会を奪われているのかもしれない。しかし，青年期にさしかかる高校生の年代は精神的自立を求めアイデンティティを確立しようとする時期で，自己表現の欲求が強い。その方向が必ずしも美術表現に向かうわけではないが，大学受験を目指した知識を詰め込む受け身的な学習が多い中で，美術（芸術）の授業は自己表現をもっとも優先する数少ない教科の一つである。実際，高校生の表現意欲は旺盛である。「自分らしさ」にこだわるような表現の追求がよく見られる。それは自我意識の深化とかっとうの中から生み出そうとしているのである。このような生徒たちにとって美術の授業は一つの救いであり，表現活動をとおして教師と心のふれあう時間でもある。このような活動を保障していくことはきわめて大切であると考える。

青少年の心の危機が叫ばれて久しい。最近の児童生徒の関わる異常とも思える事件はネガティブアイデンティティーの表現であるという指摘がされている。行き場のないうっ積された心の爆発が反社会的な行動として現れているのではないか。青少年期には精神的自立の困難性の中で自己対自己のかっとうがあるのが当然で，それを心の危機に至らせないためには，何らかの形で表現し，その昇華によって心の平静を保つことである。その意味でも，美術に限らず，歌や楽器の演奏，ダンスのような身体表現など芸術的表現活動は不可欠なものだといえる。

参考文献

実践造形教育体系 4
「子どもの発達と造形表現」
大橋浩也　開隆堂
実践造形教育体系 8
「絵のの発達とその見方」
黒川建一　開隆堂